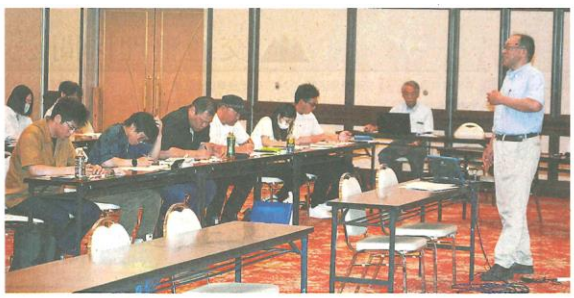
東奥日報社提供

東　奥　日　報
2024年（令和6年）8月31日（土曜日）（17）

機械工学の基礎 講座好調

八工大×村産協 昨年度スタート



流れ学の講義を受ける履修生たち＝7月、六ケ所村文化交流プラザ・スワニー

六ケ所

六ケ所村で働く若手技術者らが、大学教員から機械工学の基礎を学ぶ講座が好調だ。大学でこの分野を学んだことがない人が、原子力関連施設や風力発電設備の保全や改造などに必要な基礎知識を、働きながら村内で学べる特長がある。履修生は、実務をより深く理解したい、成長を期待してくれる人たちの思いに応えたいなど、それぞれの目標を胸にリスキリング（学び直し）に励んでいる。（新村菜穂）

地域ぷらす PLUS

若手技術者ら 目標胸に働きながら学ぶ

講座は八戸工業大学（坂本禎智学長）が主催、村産業協議会（千田昇会長）が共催し、2023年度に始まった。本年度は1期生11人に2期生10人が加わり、7月に開講した。短期集中型の講座で2年間にわたって流れ学、熱力学、機械力学、材料力学を学習し、修了時には同大が履修証明書を発行する。

初回の流れ学の講義では、同大の工藤祐嗣教授が流体の性質に関する基礎知識を解説し、履修生が計算問題を解いて理解度を確かめていた。内容は、例えば化学プラントで配管を扱う場合などに応用できる。

1期生の一人、六ケ所エンジニアリング（同村）の髙野亜子さん(25)は同大の感性デザイン学部出身で、卒業後もものづくりに関わる仕事がしたいと入社した。デザインの作業と、共通点も相違点もある設計の実務を学ぶうち、より包括的な知識が必要と考え、受講を決めた。

構造物にかかる負荷の計算などで学んだ内容が役立ち、他の人が作った設計を見たときに「なぜこのような設計になったのか、背景が理解しやすくなった」という。髙野さんは「別の講習も継続して受講して知識をつけて、経験も積んで成長していければ」と話す。

同じく1期生の成田翔也さん(22)は、ATOM Works（同村）に入社した昨年、上司から「やってみるか」と声をかけられたのをきっかけに、講座に参加した。

新しい仕事を覚えながらの学習は苦労も多いが、「講義で理解しきれなかった部分は会社の先輩が一生懸命教えてくれた。その気持ちに応えたい」と奮起。業務では主に設備点検の業務を担当している一方「学んだことを生かして、設備工事やものづくりに挑戦していきたい」と話す。

送り出す企業「成長のきっかけに」

送り出す企業側の狙いはどこにあるのか。ATOM Worksの岡山康広社長は「人材採用の門戸を広げており、専門知識や技術は入社後に教育していく必要がある。（講座で）勉強する習慣を身に付けて、成長のきっかけにしてもらいたい」と話す。

従業員の技術力向上は、企業にとっても重要になる。日本原燃は六ケ所再処理工場について、県外企業に依存している保全体制から脱却し、地元企業と共に運営する一との将来像を掲げ、技術を持った地元企業の参入に向けた取り組みを進めるとしている。

岡山社長は「アカデミックな知識を身に付けた人を一人でも増やして、地元企業が担える部分を増やしていかなければいけない」と強調する。

技術者の不足は、村産業協議会の会員企業の多くに共通する課題だ。講座を担当する八戸工業大学工学部工学科機械工学コースの太田勝学科長補佐は、実務で使うアプリや専門的な作業の背景にある理論を知ることで「現場で技術者と会話ができるようになってほしい。そこからさまざま興味を広げてもらえれば」と語る。（新村菜穂）

※「この画像は該当ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」